
令和2年度 第3回

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和2年2月3日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図^{あいず}があるまで、この冊子^{きつし}の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生^{くしけんせい}どうしの貸し借り^{かひかり}もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子^{きつし}の印刷^{いんさつ}が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子^{きつし}のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は21ページまであります。
8. 問題冊子^{きつし}は持ち帰ってください。

一 次の①～⑩の文中の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ヒンコンにあえぐ現実を問題にする。
- ② ソンケイの念を抱く。
- ③ 店のカンバンがこわれる。
- ④ 知事としてのニンキを終える。
- ⑤ カフンによるアレギー症状が出る。
- ⑥ 新しい計画をテイアンする。
- ⑦ ジュギョウで先生が言ったことを思い出す。
- ⑧ 日本文学についてケンキュウする。
- ⑨ 楽器をエンソウする。
- ⑩ 外部からコウシを招く。

二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

ところで、「世界で一番わかりにくいのは、日本語とアラビア語だ」と外国人はこんなふうにも文句を言うらしい。まあ、たしかに日本語というのはかなり変わった言語体系ではありません。

じつは、日本以外の世界に住んでいるあらかたの人びとはバイリンガルだともいえます。ひとつに限らずいろんな言語を話せることが多い。たとえばアメリカだったら、英語だけじゃなく、むしろスペイン語のほうが通用する地域というものもある。同じように、どの国でもたいてい二カ国語くらいは通用することが多い。

それに引き換え、日本人は（注1）モノリンガルだといえるでしょう。日本語以外の言語が通用する地域というのは、まずありえない。① 日本語というの言葉と国籍が直結した、いわば本質的な言語だということ。だから外国語を話すことが下手なんじゃないかと言われてしまう。

その考えはたしかに成り立つ。ただ私は、逆にこんなふうにも思うんです。② 日本語ほどバイリンガルな言葉はないのかもしれないと。

日本語には「かな」と「漢字」がありますよね。この二つは、姿も体系もまったく異なっている。「かな」から「漢字」へ、「漢字」から「かな」へ、私たち日本人はそのひとつひとつの切り替えを、読むときばかりでなく話すときも瞬間にこなしているんです。パソコンだったらこの変換は機械がやってくれるわけだけど、日常的なやりとりではそうはいかない。その膨大な量の変換を常に頭の中で行うことになる。そりゃあ疲れるはずですよ。

そのぶん、翻訳は非常にうまい。それから、外国から入ってきた技術を理解して覚えるのも大層うまいといえます。

明治維新のとき、西洋文明の流入と同時に、それまでの日本語の（注2）概念になかった言葉も大量に入ってきました。日本人は、それらになんとか漢字をあてて訳して使ったわけです。たとえば「認識」とか「観念」だとかが代表的な例ですね。

③ それを明治の初めのうちに見事にやってのけた。これは、皆さんが想像している以上に高度な作業なんです。

ちなみに今の中国語の中で、政治にかかわるものなど公的に使う言葉の多くは、日本が明治の頃につくった造語を適用しています。それこそ「政治」や「経済」、「民主主義」や「共産主義」といった言葉が良い例です。いうなれば、言葉の逆輸入ですね。もともと中国で生まれた漢字が、日本で進化を遂げ、新しい姿で中国に流入している。これも大変おもしろい現象だといえるでしょう。

こんなふうには、かなと漢字という、まったく異なった姿のものを同時に使いこなしてきたのが日本人の特殊性であり特長ともいえるでしょう。これに対し、④合理化が進む現代においては「こんな煩わしいことはやめろ、いっそ標準語を英語にしまえ」という考え方もあります。実際、すでに社員全員に英語をしゃべらせている会社もあるくらいです。たしかに、外国人との伝達の際にはメリットがあるでしょう。しかし⑤母国語を失った国というのはじつに惨めなものです。

伝統というのは、まさしく「言葉」なんです。その言葉を奪われてしまうということは、足場がない状態とまったく同じ。立つにも歩くにも走るにも、ただ外国の(注3)模倣にたよることになる。そもそも日本がこれまでの長い歴史の中で築いてきた伝統は、西洋の伝統とはずいぶん異なっています。その基礎を捨て去って、今さらまるごと西洋から借りなければならぬなんて、人間の文化にとってこれほど悲惨なことはない。

加えて、西洋の伝統からきた文明や技術の発展は、今や行き詰まりを迎えつつあるんです。年金問題も、核の問題も、すべて西洋で生まれた考え方に由来しています。日本は現代社会を形作るうえで、その文明を借りてきたはいいけれど、今になって行き詰まってしまった。そして残念なことに、西洋の文明の力では、この行き詰まりの(注4)是正がなかなかできない。でも、東洋の文明——さらにいえば日本独自の伝統なら、その行き詰まりをやわらげるか、是正する力になるかもしれない。そう考えると、伝統というのはそう簡単には手放してはいけないものだということがわかるでしょう。

ところが、日本語はどうもはつきりしない、意味をしつかり限定していないと批判される。これは外国人の多くが感じていることであると同時に、外国語のできる日本人も同様に思っていることなのです。

たしかに日本語という言語は、いくつかの難点も持っています。いうなれば、非常に悠長な言語です。表現したい内容を

強く限定して投げつけることが上手でない。それに、何か危機が起こったときに発する警告の言葉の力が弱い。他の国の言語に比べて命令形がそれほど発達していない。その命令形が動かす心情自体も強くない。そういう意味では、大変やわらかな言語ともいえます。

それから先にいったように、漢字をかなに、かなを漢字に、頭の中で変換しながら話したり聞いたりしていることの弊害も挙げられるでしょう。もちろん咄嗟のことだから、僕らは意識していない。だけど大変な危機に瀕したとき、ひと呼吸、ふた呼吸遅れる恐れはある。

その一方で、限定ばかりしていくと、こぼれ落ちてしまう事柄もたくさんある。日本語というのは限定しない代わりに、ふわふわと漂うあいまいな事柄も上手にすくいとることができる。ある程度の広がりをもっている言葉を、その広がりそのまま捉えることが可能な言語なんです。

⑥ 一般的に外国の言葉を使うのが下手なのは、日本人と韓国人だと言われています。でも日本人と比べれば、韓国人の方がよほど上手でしょう。そう言われる理由の一つに、日本語には「子音の種類が少ない」という特徴が挙げられるそうです。つまり、子音に対する聴覚が発達していない。だからその土地に送られて二カ月〜三カ月、あるいは半年くらい経ないと、そこで使われている言葉を聞き取るだけの聴覚が身に付かないんだそうです。まあ、たしかにそういう面はあるでしょう。でも、問題はもつと根本的な部分に存在しているような気がします。

私たちの使う漢字というのは(注5) 表意文字です。昔々にさかのぼれば、元は象形文字なんです。漢字の持つ意味はたいそう広い。私たち日本人は、その意味の深さをたった一文字の中に含んで使っているわけです。つまり、ある意味の広がりや、そっくりそのまま捉えて言葉の中に組み込む能力が日本人にはある。無論、漢字というのは中国からのものですよね。しかし、現在の中国語は、近代日本語の構造をだいぶ受けて、かなり表音化しているそうです。むしろ日本語のほうがまだ表意にこだわっている。

そもそも日本人には、意味を一つだけに限定して、単純明快に論旨を組み立てるという習慣が薄かったともいえる。そうい

う技術は異国の人たちと交わるうちに学んで教えられたことで、時代が進むにつれてずいぶん慣れたものの、本来はやっぱり、苦手なのかもしれない。

ある事柄を、ある広がりそのままに表現して伝える。聞く方も、ある広がりそのままに聞いて答える。あるいは、その広がりを自分の中に留める。そういうやりとりのほうが、長い歴史の中で培^{つちか}ってきた日本人のもともとの性分^{しょうぶん}なのかな、という気がします。

しかしながら時代が移り変わり、ますます国際化が進むにつれて、言葉のあり方も変わってきている。もともとの性分と、後から流入した使い方との間で、現代の僕らの言葉は分裂^{ぶんれつ}しているんですよ。これからは、少し悲しいことではあるけれど、伝統をそのまま続けるのではなくて、今の時代に適^{かな}ったかたちで言葉を使っていくことになると思います。とはいえ、むやみに変えればいいわけでもない。よその国はどうなっているのか、世界ではどういう形が求められるのか考えながら、日本語の意義を再認識することが必要になってくる。

(古井由吉『言葉について』より)

(注1) モノリンガル一つの言語のみを話す人。

(注2) 概念^{がいねん}ある物事についてのおおまかな意味内容。

(注3) 模倣^{もほう}ほかのものを真似^{まね}ること。

(注4) 是正^{ぜせい}悪い点や不都合な点を改め直すこと。

(注5) 表意文字^{ひょういもんじ}意味を表している文字。これに対し、音を表している文字を表音文字という。

問1 — 部① 「日本語というの言葉と国籍が直結した、いわば体質的な言語だ」とありますが、どういことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 日本語を話すのは日本人しかないということ。
- イ. 日本語を上手に話せるのは日本人しかないということ。
- ウ. 日本人として生まれた人間は日本語しか話してはいけないということ。
- エ. 日本人は日常生活において日本語以外はめったに使わないということ。

問2 — 部② 「日本語ほどバイリンガルな言葉はないのかもしれない」とありますが、日本人のどのような点がバイリンガルだと言えるのですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 「かな」と「漢字」という二種類の文字の膨大な量の変換を、パソコン並みのスピードでこなしている点。
- イ. 「かな」と「漢字」という姿の異なった二種類の文字の切り替えを、日常的なやり取りの中で瞬時にこなしている点。
- ウ. 「かな」と「漢字」という姿の異なった二種類の文字の切り替えを、疲れも気にしないでこなしている点。
- エ. 「かな」と「漢字」という二種類の文字の膨大な量の変換を、読み書きだけでなく翻訳する際にもこなしている点。

問3 — 部③ 「それ」とありますが、その指示内容を三十字以内で答えなさい。句読点などの記号も字数にふくめます。

問4 ―部④「合理化」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 理解を深めるために同じ言葉を話すこと。
- イ. 時間を短縮するために結論を急ぐこと。
- ウ. 効率を上げるためにむだを省くこと。
- エ. おたがいを理解して同じ考えを持つこと。

問5 ―部⑤「母国語を失った国というのはじつに惨めなものです」とありますが、どのような点が惨めなのですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 外国の真似をすることばかりが重視され、自国の伝統を無視するようになるという点。
- イ. 母国語を失うことで、自国にあるものを表現する手段をなくしてしまうという点。
- ウ. 外国からのものごとを受け入れて、自国の伝統をより豊かにできなくなるといふ点。
- エ. よりどころがなくなつて、何をするにも外国の文化にたよらざるをえなくなるといふ点。

問6 ―部⑥「一般的に外国の言葉を使うのが下手なのは、日本人と韓国人だと言われています」とありますが、日本人が外国の言葉を使うのが下手な理由を、筆者はどのように考えていますか。その説明をした次の文の空らんA・Bに当てはまる内容を、それぞれ三十字以内で本文中からぬき出しなさい。句読点などの記号も字数にふくめます。

外国人が A のに対して、日本人は B。このような違いがあるから、日本人は外国語を使うのが下手なのだ。

問7 この文章を読んだA～Dの四人が議論しています。この中で本文の内容を誤って読み取っている者を一人選び、記号で

答えなさい。

A. 以前京都に旅行に行ったときに、色々なお寺を見学して日本人の伝統を感じたことがあったな。日本の言葉にも日本人らしい伝統が生きていて、それを大切にすべきだって考えている筆者の意見には賛成だな。

B. たしかに西洋の文明の力では解決できない色んな問題が筆者の言う通り実際に起きていて、それを解決する手段はさまざまな姿の言葉を生み出した東洋の文明にしかないわけだから、ぼくたちも日本の文化をもっと大事にすべきだと思う。

C. そうだね。筆者が言っているように日本語は他の外国語と比較ひかくするとあいまいで悠長ゆうちやうなところがあるけど、決して欠点ばかりではないわけだから、言葉をふくめたさまざまな日本の伝統や文化の良い部分について改めて考えるべきだろうね。

D. でも時代は移り変わるから、昔の伝統にこだわりすぎていては他の国の人とのコミュニケーションがとれなくなる。私も筆者と同じように、他の国の人のことも考えながら今までとは違う日本語の使い方を考えるべきだと思うよ。

③ 次の文章は、中学一年生のさゆきが、幼なじみのテツの家を訪問した場面です。真ちゃんしんはさゆきのいとこで、高校に進学せずロックバンドの活動に打ちこんでいます。これを読んで、後の設問に答えなさい。

「おばさん、こんには。テツ、寝てる？」

テツんちの魚屋をのぞいて、今日も元気そうなおばさんに声をかけると、

「あらまあ、さゆきちゃん、わざわざ来てくれたの？ どうもありがとねえ。それが、テツったら朝は部屋でゴロゴロ寝たのに、さっきのぞいてみたらいないのよ。まったくどこをほっつき歩いてんのかしら、学校休んで。ほんとにしようがない子だねえ、さゆきちゃん、勉強教えてやってね」

息もつかせぬスピードでおばさんはしゃべりだした。

「おばさん。テツ、本当に風邪？」

① たじろぎながらも、あたしがききづらいことを思いきってたずねると、

「アハハ、ありやあ、どう見たって仮病だね」

おばさんは豪快ごうかいに笑う。

「でもね、仮病かびょうだったって、立派な病気だよ」

「病気？」

「そう、心の」

「……」

「でも、こうやってさゆきちゃんが来てくれるうちは安心よ。だいじょうぶ、きっと明日になったらけろっとしてるから、あの子は」

おばさんはそう言って、あたしの頭に右手をポンとのせた。

大きくて、あつたかい手。

この手のなかで育てられたテツは、もしかしたらあたしが思っているよりも、ずっと強い子なのかもしれない。

一瞬、そんな気がした。

「それにしてもあの子、どこ行っちゃったのかしらねえ。もうこんな時間だっていうのに」
夕暮れの空を見あげて、おばさんが不安げな表情をのぞかせる。

「だいじょうぶだよ、おばさん。あたし、知ってるから、テツのいるところ」

あたしは自信を持って言いきった。

家にいないとなると、絶対にあそこだ。

「えっ、どこ？」

まんまるい目をパチパチさせるおばさんに、

「秘密の場所」

なぞの文句を残して、あたしは駆けだした。

秘密の場所へ。

昔。

まだあたしたちが虫採り網を片手に蝶々を追いまわすくらい小さかったころ。

高志くんと真ちゃんとお姉ちゃんとあたしは、ほとんど毎日のように四人で遊んでいた。

林へ、

森へ、

川へ、

そして、だれも知らない遊び場を発見するために、まっすぐな川原道を四人ならんで歩いた。

先頭が、リーダー格の高志くん。

つぎが、しつかり者のお姉ちゃん。

そのあとに真ちゃんが続いて、あたしはいつもびりつけつだった。

おとぎの国の兵隊さんみたいに、きちんと整列してあたしたちは歩く。

そうすると、決まって後ろからひよこひよこ追いかけてくる、小さな男の子がいた。

それが、テツ。

「いっしょに連れてって」

泣きそうな顔でテツが言うと、いつも高志くんは【A】を横にふった。

「ダメ。テツはすぐ泣くから」

「そうよ。足手まといになるから、いや」

お姉ちゃんもブイとそっぽをむく。

置いてきぼりをくらったテツの泣き声をききながら、ふたたび歩きだすあたしたち。

「放つとけよ、テツなんか」

高志くんの命令。

それでも、置いてきたテツの泣き顔が頭にちらついて、だんだん【B】が重くなっていく。

五分くらいして立ちどまると、決まって真ちゃんも足を止めていた。あたしと真ちゃんは顔を見合わせて、同時に後ろをふりかえり、走りだす。来た道を引きかえして、テツをむかえに。

それが、いつものパターンだった。

とりのこされたテツが泣いている場所は、いつでもひとつ。

この小さな町を一番きれいに見渡せる小高い丘。人家から離れているせいか、静かで、よいいな物音がひとつもない。黒々とした土と、風の匂いと、足下を覆うぺんぺん草と。

そこが、あたしたちの「秘密の場所」だった。

そこから見える景色は最高で、雪の降った朝や、木の葉が紅く染まる季節なんかは、本当に胸がドキドキするくらい町がきれいに見えた。

この丘は、あたしたち三人だけのものにしようね。ほかの人に教えるのはもったいないよ。いつのまにかそんな約束をした。

テツを迎えに行ってから、あたしたちはいつも日が暮れるまでその丘で遊んだ。

やっぱり。

テツはそこにいた。

何年かぶりに来た丘の上、【C】を抱えたテツの小さな背中があった。

「テツ」

呼びかけると、その背中がピクンと震えた。

「さゆきちちゃん！」

ギョツとした顔でふりむいたテツ。やがて、うつすらと笑った。

「よくわかったね、ここ」

「そりやそうよ。あんた、ちっとも変わってないんだから。いじけたときに来る場所まで昔のまんま」
言いながらあたしはテツのとなりに腰かけた。

「もう、いじけてないよ、ぼく」

町に顔をむけたまま、テツがつぶやく。

「決心したんだ。ぼく、もっと強くなるって」

「は？ やっぱりあんた、熱でもあるんじゃない？」

「そんなんじゃないよ。ほんとに、ほんとに、強くなるんだ」

「なんなの、いきなり」

あたしが前かがみにテツの顔をのぞきこむと、

「昨日、きいたよ、真ちゃんから」

テツは表情をびくりともさせず、器用に口だけを動かして言った。

「東京に行くんだってね、真ちゃん」

②どくどくと、心臓がせわしく音を立てはじめる。

今日一日、そのことをできるだけ考えないようにしていたあたしの努力は、この瞬間にだいなしになってしまった。

「さゆきちゃん、真ちゃんの歌、きいたことある？」

「あるよ、一回だけ」

あれは真ちゃんが高校受験をすっぽかした夜だった。

おじちゃんになぐられたらしく、左のほっぺを赤紫に腫らしてうちにきた真ちゃんは、

「昨日の夜、すっげーいい曲ができたんだ。だれかにきいてほしくってさ」

けろとした顔でそう言うと、あたしの部屋で自作の歌をうたいだした。

むずかしい言葉や英語ばかりで歌詞はよくわからなかったけど、うたっている真ちゃんの目は真剣で、腫れたほっぺが痛々

しくて、きいているうちに③あたしはなんだか泣きたくなった。

真ちゃんは本当に、心から歌が好きなんだな。

そのとき、そう思ったつけ。

そしてあたしも真ちゃんの歌が大好きになった。

「ぼくね、昨日、はじめてきいたよ。真ちゃんの歌」

テツがちよつと得意げに言った。

「昨日の夜、真ちゃん、うちに来たんだ。ぼくそのとき落ちこんで……いじめられるのなんかなれてるけど、でも泥棒どろぼうとか、家の悪口とか言われたのがくやしくて。そういう話、真ちゃんにしたら、そしたら真ちゃんとつぜんが突然……」

「突然？」

「おまえ、もつと強くなれ、つて」

「……」

「おれ新宿に行くから、おまえ、もつと強くなれつて、真ちゃん……。きつと、さゆきちゃんのためだよ」

「あんたのためでしょ」

「ん……でもそれだけじゃないよ。真ちゃん、自分が遠くに行くもんだから、だれか強い人をさゆきちゃんのそばに置いときたいんじゃないかな」

「そんな④……」

「きいたよ、真ちゃんちのおじちゃんとおばちゃんのこと」

テツがいきなり話を変えるから、あたしはますますどきつとした。

「なによ、急に」

「ぼく、ぜんぜん知らなかったけど、あそこのおじちゃんとおばちゃん、もうずいぶん前からなんかダメだったみたいだね。ずっと家のなかの空気が悪かったつて、真ちゃん、言つてた。だから、さゆきちゃんが家に来るのがうれしかったつて」

「あたし？」

「さゆきちゃんが遊びに来ると、家のなかに花が咲いたみたいになるんだって。おばちゃんもよく笑うし、おじちゃんも機嫌がよくなるし、だから、さゆきちゃんにはすごく助けられたって」

「……」

「そのさゆきちゃんを置いて新宿に行くこと、真ちゃん、きつと悩んだと思うよ」

あたしはプイツとそっぽをむいて、うるんだ瞳を隠した。春のひなたぼっこみたいなテツの声は、あたしのどこかで凍りついていた涙を、しわじわとこかしていく。

「ぼく、約束したよ、強くなるって。それから真ちゃんにうたってって頼んだんだ。新宿に行っちゃう前に真ちゃんの歌がききたくて……。真ちゃん、照れながらうたってくれた。ジンジンしたよ。ぼく、好きだなあ、真ちゃんの歌。もつといろんな人にきかせてあげたいって思ったよ。真ちゃんもきつと、もつといろんな人にきいてほしいんだね。だからさ、さゆきちゃん」

妙に大人びたテツの瞳が、あたしの瞳をのぞきこむ。

「さゆきちゃん、真ちゃんのこと、引きとめたりしないよね。東京の、キラキラした街で好きな歌、いっぱい、うたわせてあげようよ」

「……」

じわつと右目に涙がうかんで、つられたように左目からも涙があふれる。こらえても、こらえても、止まらない。

「真ちゃん、さゆきちゃんのこと、すごく心配してたよ。さゆきちゃんは一見たくましいけど、じつはぼくよりデリケートなんだって、ほんと？」

「ばか」

⑤ テツの頭をばこんと叩いてから、あたしはわあわあと声をあげて泣きだした。

あたしが行かないでと泣いて頼んだら、真ちゃんは新宿に行くのをあきらめてくれるかもしれない。弱虫だったテツを残して、高志くんたちと遊びに行けなかったみたい。こつそりとこの場所にもどってきてくれるかもしれない。

でも、そんなこと、できないよ。

真ちゃんはなによりも歌が好きで、あたしは歌の好きな真ちゃんがだれよりも好きなんだから。

「もう泣かないでよ、さゆきちゃん」

⑥ なかなか泣きやまないあたしに、こまったようなテツの声。

「ぼく、真ちゃんのかわりに強くなるから。今日もね、学校休んでここに来て、町にむかってずっとつぶやいてた。強くなるぞ、強くなるぞ、って」

「あんたなんか百人いたって真ちゃんにはかなわないわよ」

むくつと顔をあげて言うと、テツはちよつと考えてから、

「うん。でも、いないよりはマシだと思うな」

ばかみたいにまじめな顔をして言うので、あたしはおかしくなって吹きだした。

なんだけか、へん。テツを上げますつもりでここに来たのに。

「帰ろう」

テツが立ちあがってズボンについた砂をはたく。

「うん」

あたしも⑦ しやきんと背をのばし、夕暮れの町を見渡した。

空を染めていた橙^{だいだい}色は、もうすっかり闇^{やみ}のなか。

ちらほらと顔を出しはじめた星と、町のかすかなネオンの光。

どこか遠くで犬の鳴き声がきこえる。

「もう、しばらくここには来ないかも」

小さな声でつぶやくと、となりでテツがうなずいた。

「でも、ここから見える景色は、変わらなければいいな。十年後も、百年後も、このままずっと」
「うん。千年後もね」

顔を見合わせて笑ってから、あたしたちは町のなかへともどっていった。

(もりえと森絵都『リズム』より)

問1 空らん【A】く【C】に当てはまる語として最も適切なものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア・あご イ・うで ウ・ひざ エ・足 オ・首

問2 —線部①「たじろぎながらも」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア．あつとう 圧倒されてひるみながらも
イ．口調を不愉快ふゆかいに思いながらも
ウ．相手の勢いを無視しながらも
エ．努めて自分のペースを保ちながらも

問3 —線部②「どくどくと、心臓がせわしなく音を立てはじめる」とありますが、なぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア．いつもとちがって表情を変えずに話すテツの様子を目の当たりまにして、取り乱したから。
イ．テツの言葉で真ちゃんが東京へ行くという現実まに直面させられて、落ち着きをなくしたから。
ウ．真ちゃんがいなくなる現実を受け入れて強くなるうとしているテツを前にして、おどろいたから。
エ．大好きな真ちゃんのことをいきなり話題にされたことで、心を見すかされてはずかしくなったから。

問4 — 線部③ 「あたしはなんだか泣きたくなかった」とありますが、なぜですか。その理由の説明として最も適切なものを

次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・高校受験をすっぱかしたのだから真ちゃんがおじちゃんになぐられたのは当然だと思っただが、実際に腫れた真ちゃん
のほっぺを見るとかわいそうであまらなくなつたから。

イ・高校受験をすっぱかしたくらいで真ちゃんがおじちゃんになぐられたのは恐ろしいことだと思っただが、それでもがま
んしている真ちゃんのいじらしい姿を見て悲しくなつたから。

ウ・高校受験をすっぱかしたからといって真ちゃんがおじちゃんになぐられたのはかわいそうだと思っただが、それでも歌
に対する情熱を持ち続けている真ちゃんの真剣な姿に感動したから。

エ・高校受験をすっぱかしたぐらいで真ちゃんがおじちゃんになぐられたのはおかしいことだと思っただが、それでも真
ちゃんに対して何もしてあげられない自分が情けなくなつたから。

問5 — 線部④「……」とありますが、これはさゆきのどのような様子を表現していますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 真ちゃんのさゆきに対する思いについてのテツの言葉があまりにもするどく自分の願望を言い当てているので、返す言葉がなくなっている様子。

イ. テツが真ちゃんの考えについて全く的是なことを言うので、あきれてしまい、何と書いていかわからなくなっている様子。

ウ. 真ちゃんがテツにさゆきのために強くなれと言っているのだというテツの言葉は受け入れられないが、反論のしかたが思いつかないでいる様子。

エ. 真ちゃんの心の中に、さゆき自身も気づかなかったやさしい思いやりがあったことを知っておどろき、言葉を失っている様子。

問6 — 線部⑤「テツの頭をばこんと叩いて」とありますが、なぜさゆきはこうしたのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 自分よりも弱虫だったテツに自分の心の弱さを指摘されて腹が立ったため。

イ. 泣き虫だったはずのテツに言われたことが凶星ではずかしかったため。

ウ. 言わなくてもわかりきっていることをわざわざ聞くテツのことをばかだと思ったため。

エ. 自分のことを泣かせようと思っただけ感動的なことばかり言うテツのことをとがめようとしたため。

問7 ——線部⑥「なかなか泣きやまないあたし」とありますが、ここでのさゆきの心の葛藤を、五十字以上六十字以内で説明しなさい。句読点などの記号も字数にふくめます。

問8 ——線部⑦「しゃきんと背をのぼし」とありますが、ここからさゆきのような気持ちが読み取れますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・真ちゃんが東京へ行ってしまふのは悲しいけれど、今まで自分よりも弱いと思っていたテツもそれをきっかけに強くなるうと決意しているので、自分もいつまでも悲しんではいけないという気持ち。

イ・真ちゃんが東京へ行ってしまえば、テツを守るのは自分しかないということに気がつき、真ちゃんに負けないように自分はテツを守るほど強くならなければならぬと決意する気持ち。

ウ・真ちゃんは東京に行ってしまうし、真ちゃんの両親もうまくいっていないし、未解決のなやみごとはたくさんあるけれど、それでもこの場所があれば自分は立ち直れると自分をはげます気持ち。

エ・真ちゃんは東京に行ってしまうけれど、永遠に会えなくなるわけではないのだから、自分もいつかは東京に行けば真ちゃんにふさわしい女性になれると将来に希望をもつ気持ち。

(お わ り)

